「出題の意図」

選抜区分 学校推薦型選抜	２０２２年度　（選抜区分：学校推薦型選抜） 文学部　比較文化学科　（科目名：小論文）
出題の意図 （評価のポイント）	問題Ⅰ 問５ 問題文の主題に関して意見を英語で述べさせることにより、英語の読解能力、英文の構成能力（英単語、英文法、英語構文に関する知識）、発想力、論理的思考力を問うた。 問題Ⅱ 問２ 　自身の知識や経験から、解答に当てはまる適切な事例を選び出し、論理的かつ具体的にまとめる力を問うている。取り上げる事例は、必ずしも前近代と近代以降とで変化したものである必要はない。特定の単語を聞いた際に、その文化圏の人々が思い浮かべるイメージ（画像）が時代の変遷とともに変化した事例を挙げればよい。例えば、電話の形態が有線ダイヤル式から携帯電話、さらには、スマートホンへと変化したことや、日本の学生の制服がセーラー服と詰襟からブレザーへ、そして、近年では女子学生もスカートとスラックスとの両方から選べるように変化したこと、その他、鉄道の変化（蒸気機関車から電車・新幹線へ、あるいは、改札が有人から自動へ）、一万円札の変化（聖徳太子から、福沢諭吉、2024 年からは渋沢栄一へ）等、自身の知識や経験から導き出せる事例は数多く存在すると言えよう。 　そのように、この問に結び付く適切な事例を見つけ出す発想力と、変化の様相を論理的かつ具体的に論述する力とを求めている。 以下、例を二つ挙げる。 （例１） 「きりん」と聞くと、現代人のほとんどは動物園でも見ることが可能なあの首の長い哺乳類を思い浮かべるだろう。しかし、哺乳類の「きりん」の絵姿を日本人が目にしたのは、寛文三年（1663）長崎出島にもたられたオランダの動物学者・ヨンスン著『動物図説』の挿図が最初だと思われ、しかも極一部の人しか目にしていない。江戸時代までのおおくの日本人にとって「きりん」とは所謂霊獣の麒麟であった。それでは、霊獣の麒麟はどのような姿であるかと訪ねると現代人は何を思い浮かべるだ

	ろうか。おそらくキリンビールのラベルを思い浮かべる人が少なくないだろう。そのキリンビールの麒麟は頭部が龍型となっているが、これは中国・宋時代以降に見られるようになるものである。日本の正倉院の宝物には、麒麟が表されたものが少なくないが、それらはいずれも鹿型である。これは、中国・唐時代までの麒麟が鹿型であったためだ。 （例２） 今年の NHK 大河ドラマ「青天を衝け」は、日本資本主義の父と称される渋沢栄一の生涯を描いている。栄一は、天保十一年（1840）に現在の埼玉県深谷市血洗島に生まれた。生家は、藍玉の製造販売と養蚕を兼営する農家であり、ドラマには NHK が復元した栄一が生まれ育った集落が登場したが、それは田畑の中に茅葺屋根住宅が点在するものであった。そのような茅葺屋根が散見される農村風景は40数年前までは珍しいものではなかった。実家が専業農家である知人によると、1970 年代後半まで、実家のある集落ではほとんどの家が茅葺屋根であったという。しかし、1980 年代前半、集落のすべての家が瓦屋根に建て替えられたそうだ。その最も大きな要因は、茅葺葺き替えの専門的技術をもった職人の数が激減したことにあるという。また、葺き替えの際には集落総出で手伝う必要があり、その手間を省けることからも次々と建て替えられていったという。